令和７年度ユースチャレンジ！コラボプロジェクト
採択事業検討会（２日目）議事要旨

■日　時：令和７年５月22日　16:00～20:00
■場　所：仙台市市民活動サポートセンター　６階　セミナーホール
■出席者：柴田由紀委員長、大井菜摘委員、太田貴委員、齊藤祐輔委員、眞野美加委員
※過半数の出席により委員会成立
■事務局：市民協働推進課長、連携推進係長、他担当職員

■次第
１　開会
２　議事
（１）プレゼンテーション・審査
３　協議（非公開）
４　閉会

■会議内容

1　開会

2　議事

（1）プレゼンテーション・審査

・事業プレゼンテーション

（省略）

・質疑応答

次ページのとおり

事業８
事業名：　«自由提案型»　中山商店街　×　Naniyaru のカフェ事業
団体名：　Naniyaru

柴田委員長：
解決したい課題として「住民が地域に魅力を感じていない」という仮説を立てている一方で、実際に取り組もうとしている事業の目的が「地域外の人との交流促進」である点に齟齬があるように思われる。その点について、もう少しご説明いただきたい。

団体：
外部からの視点を地域内の人々に伝えることで、住民自身が「自分たちの地域にも魅力があるのだ」と気づく契機になると考えている。したがって、住民と地域外の人が接点を持つ交流の場としてカフェを設置することを企画した。

太田委員：
既存のカフェ（たむカフェ）との関係性、いわば棲み分けについてお伺いしたい。

団体：
現在、たむカフェの営業は週に 1～2 回であり、常設ではないため、営業していない時間帯に関しては利用者のニーズを満たせていない状況である。その隙間を埋めるように学生によるカフェ運営を行う予定で、補完する役割を担いたいと考えている。

太田委員：
交流を促す工夫のある企画を実施しながらカフェを運営することで、集客を図るとともに「こんなカフェがあったのか」と地域の人々に知ってもらうきっかけを作り、最終的にはたむカフェの利用にもつながっていくような仕組みにしたいということか。

団体：
おっしゃる通りである。

齊藤委員：
そもそも人通りが減少している商店街において、カフェの営業時間帯に実際に人が通行するのかどうか、その見込みについて何か調査は行っているか。

団体：
現時点で、具体的な調査は行えていない。学生という立場もあり、自分たちが出店可能な時間帯に活動時間を設定している。今後、住民の動向を正確に把握していきたい。

齊藤委員：
プロジェクトの出発点としては、やる気があるのは大変よいことだが、仮説の精度を高めるためにも、他の要因との関連性を検討しておくと、取り組みが空振りに終わるリスクを減らせると思われる。

眞野委員：
学生による一時的なカフェの出店という形での取り組みとなっているが、先ほどの齊藤委員の発言にもあったように、そもそも現在の商店街は人通りが少ないという状況の中で、具体的にどの程度の集客を見込んでいるのか。運営の形態についても、より詳細に詰めていただきたいと思う。
また、中山地区の課題として「人手不足」および「継続困難」を挙げているが、特に「継続困難」という点について、何か仮説はあるか。

団体：
この課題については、過去に商店街振興組合の方々とお話しした際に伺ったものである。特に人手不足・担い手不足が大きな要因であり、アルバイト学生の確保も難しい状況が「継続困難」という課題に繋がっていると考える。

眞野委員：
地域に根ざした継続的な取り組みを行うにあたって、具体的にどのような人々が、どのような形で関わると考えているか、イメージがあればお示しいただきたい。

団体：
現時点で想定している関係者としては、商店街振興組合の加盟店主や地域の関係者、あるいは将来的には研修を経た若者たちなどが継続的に関わる体制が構築できればと考えている。

大井委員：
実際のカフェ運営は団体のメンバーのみで実施するのか。

団体：
団体メンバーは 23 名おり、その中から交代制で運営を行う計画である。

大井委員：
カフェ営業に際し必要な許可申請等は問題ないか。

団体：
必要な許可申請については今後進めていく段階である。

事業９
事業名：　«テーマ設定型»　人流楽器によるひらかれた演奏体験と地域回遊促進
団体名：　人流楽器制作集団

柴田委員長：
ワークショップの参加人数は何名ほどを想定しているか。

団体：
団体のメンバー3 名であるため、デモンストレーションにあたっては 1 人あたり 4 名程度の体験をサポートする予定。合計で 10～12 名程度の参加を想定している。

大井委員：
この事業を仙台で行うにあたって仙台ならではの要素があるか。

団体：
仙台は定禅寺ストリートジャズフェスティバルなど広域的なベントが開かれており、イベントと絡めたアプローチをとりやすいと考えている。

太田委員：
事業予算の交通費および滞在費について質問する。東京在住メンバーの参加を予定していると思うが、想定しているワークショップ 3 回のうち 2 回分の交通費のみ計上されている。3 回のうち 1 回は東京在住メンバーが参加しないという理解でよいか。

団体：
初回のワークショップ時は人流楽器をまだ誰かに利用してもらう状況に至っていない想定のため、知り合いを集めてクローズドの形で実施することを予定している。そのため、東京在住メンバーがいなくても実施可能と考えている。

齊藤委員：
都市の回遊性の低下を解決しようと思うと、団体がワークショップを続けるだけでは難しいと考える。
長期的に課題を解決するにあたって、どのような仕組みや連携をしていくか考えはあるか。

団体：
このプロジェクトは最終的にプラットフォームとして自立させたいと考えている。第三者が利用できる形にし、地域内で複数の事業者がプロモーションの一環として活用するイメージである。事業者ごとに独自の更新を行い、ユーザーが日々サービスを利用することで、都市に「日常的な回遊性」が生まれるのではないかと期待している。

眞野委員：
録音機能を活用することで、「その日の誰かの音の記憶」を後日体験できる点が魅力的であると感じた。ただし、回遊性向上のためには地域企業との密接な連携が重要になると考える。現在のところ、商店街の店舗など一般企業との協力状況について具体的な事例はあるか。

団体：
現状では店舗との具体的な連携は残念ながらまだ少ない。ご指摘の通り、多くの事業者等との連携が今後の課題である。

眞野委員：
昔から裏通りへの人の誘導には課題があったが、音という新しい視点は非常に新鮮である。ぜひ回遊性の向上と仙台の経済圏活性化につなげてほしいと期待している。

事業 10
事業名： «自由提案型» 仙台防災枠組 10 周年を振り返る その意義と価値を日本全国へ
団体名： HagiiZ

太田委員：
予算の見積がざっくりしていて事業の具体的なイメージが掴めなかった。
例えば、事業収支予算書には、インタビュー時の交通費として 15 万円が計上されているが、これはグループでどこかに行く想定なのか。また、何名程度がインタビューに関わり、何箇所くらいで実施するつもりなのか。さらに、インタビュー時の取材費として 5 万円、大学生呼び込みのための費用として 10 万円が計上されている。おそらく、これは「現地開催」の際に茨城大学の学生を招くための費用も含まれていると理解しているが、「現地開催」という言葉についても、それがどの地域を指しているのかが明確でなかった。
そして、会場費についても、何名程度を集め、何回程度のイベントを想定しているのかが分からなかった。

団体：
まず交通費について、我々のチームは 15 名で構成されているが、インタビューの実施に関わるのは最低 2 名多くて 4 名程度を想定している。インタビューの実施場所は仙台市内に限らず、この枠組に関わった方々が全国、あるいは海外にもいらっしゃることを踏まえ、日本各地を対象としている。さすがに助成金の範囲で海外までは難しいと考えており、今回は日本国内の関係者を訪問し、インタビューを行う予定である。
次に、「現地開催」についてであるが、現時点では仙台市内で 1 回の開催を予定している。可能であれば、仙台市内や宮城県内、そして茨城大学をはじめとした東日本大震災や防災に関心を持つ大学生の団体を招きたいと考えている。団体数は 5～10 団体程度を想定。すべての参加者に旅費を支給するのは難しいと考えているが、講師などの必要な方には旅費を支給する予定である。
会場費についても「現地開催」1 回分で見積もっている。

太田委員：
インタビューは何回くらい実施する予定か、また、どの程度の人数に対して行う想定か。

団体：
インタビューの内容は Instagram 等で発信していきたいと考えており、あまりにも回数が少ないと、社会への発信力が下がってしまうと考えているため、最低でも 5 回は実施したいと考えている。

齊藤委員：
繰り返しになるかもしれないが、今回のプロジェクトの概要は「仙台防災枠組」の重要性や魅力をインタビュー調査により明らかにし、それを発信するという理解でよいか。また、その発信の先に、どのような成果を期待しているのか。

団体：
プロジェクトの概要については間違いない。
成果については、まず大学生の皆さんに「仙台防災枠組」という存在を知ってもらい、それが仙台市の安全基盤にどう関係しているのかを博士課程の我々の視点から伝えたいと考えている。それによって、大学生の中に「宮

城・仙台に残りたい」「宮城・仙台で働きたい」と思う方が増えれば、地域活性化につながるのではないかと考えている。つまり、情報発信を通じて地域への愛着や関心を高めてもらうことが、プロジェクトの先にある成果だと捉えている。

齊藤委員：
このプロジェクト以外で、情報発信の対象としている方々に対して行っている取り組みはあるのか。

団体：
既にいくつかの取り組みを行っており、Instagram での発信も始めている。
また、この防災枠組に関する発信プロジェクト自体は、今回の助成金がなければ実施できないと思う。なぜかというと、関係者が誰であったか、どのような企業が関わっていたのかなどは、一般の調査では明らかにしきれない部分があり、直接教えていただく必要があるからである。

眞野委員：
仙台防災枠組について、なぜそれが広く認知されていないと感じているのか。

団体：
まず、我々自身が知らなかったからである。我々は東北大学変動地球共生学卓越大学院プログラム(SyDE)に参加している博士課程の学生であり、防災やリスクに関心を持っている者たちであるが、そのような我々ですら「仙台防災枠組」については授業で初めて知ったという状況である。団体の他のメンバーに聞いても「知らなかった」という声が多かった。よって、我々のような防災に関わる人間ですら知らなければ、一般の大学生も知らないであろうという仮説を持っている。

眞野委員：
大学生をターゲットにしているとのことだが、それ以外の層に伝える予定はないのか。

団体：
現時点では大学生をメインターゲットとしている。ただし、私自身サイエンスコミュニケーターとしての視点から申し上げると、大学生に情報を発信することは、彼らの家族や友人など多世代への波及効果も期待できる。まずは大学生にしっかりと届けることが、他の層への拡がりにもつながると信じている。

眞野委員：
その波及を期待するならば、時間の経過とともにその効果が薄れていく可能性がある。それを踏まえたうえで、どのくらいの期間で成果を達成するという見通しはあるのか。

団体：
長期的な視点ではまだ設計できていない。ただ、発信方法として勉強会に限らず、Instagram など形に残る手法も用いることで、一定の持続性は確保できると考えている。

大井委員：

今回のインタビューから多くの示唆やデータが得られるのではと感じた。その結果を取りまとめることは検討されているか。

団体：
本プロジェクトで得られた成果に新規性が見いだせれば、学術誌への投稿や学会での発表につなげていきたいと考えている。

柴田委員長：
提案された事業は「仙台の魅力発信」に焦点を当てているが、防災枠組の発信が中心であり、学生の防災力向上には至らないのではないか。

団体：
「至らない」というよりも、あえて「やらない」という判断である。防災力向上に直結する具体的なアクションに踏み込むと、時間的にも人的にもリソースが足りなくなる。また、そもそも防災に関心のない層に「こうすべき」と行動変容を求めても響かないと考えている。
そのため、まず社会の中に「防災が大切だ」という意識の下地を作ることが重要であると判断した。そのような基盤があれば、他の方が行う具体的な防災行動や発信も、より受け入れられる社会になるのではないかと考えている。

柴田委員長：
実際、仙台防災枠組に関する冊子や体験談も既に存在しているが、それらでは伝わらなかったことを、今回の取り組みで伝えようとしているのか。

団体：
その通りである。我々は既に Instagram での発信を行っており、身近な学校科目と組み合わせることで、高校生など若年層にも受け入れられやすいコンテンツに仕上げている。本プロジェクトにおいても、我々ならではの切り口で「仙台防災枠組」の魅力を伝え、より深く社会に浸透させることができると信じている。

事業 11
事業名： «自由提案型» Sendai Re:Fashion Day
団体名： 仙台リファッションデー

柴田委員長：
会場費が 20 万円との記載があるが、これがかなり大きな比重を占めていると感じた。どのような会場を検討しているかお尋ねしたい。

団体：
仙台に限らず、営利目的のイベントを開催しようとすると、安価ではどうしても会場を借りることが難しいという現状がある。イベントの規模からして、協賛してくださる企業に対して十分なリターンを用意するのが難しい状態であった。結果として協賛金も得づらくなり、希望する会場が確保できないという悪循環が生じていた。

齊藤委員：
仙台リファッションデーによる地域活動の取り組みが非常に興味深かった。これからさらに何ができるのかという点について伺いたい。

団体：
これまで、仙台高校の授業の一環として事業を実施したり、古本屋が主催するアーケードでのイベントに参加したりしている例がある。今後は活動を広げていくことで、家庭ごみ削減を目指す取り組みにもつなげていけると考えている。

齊藤委員：
既存の取り組みの中で最後に必ず余ってしまう服があると思うが、どう対応しているのか。

団体：
現状では、布地はリユースするほか、こどもが遊べる工作キットとして再利用したり、布製カーネーションを作る活動に使ったりしている。

齊藤委員：
布の形状に戻して再活用するという考え方は非常に面白い。

太田委員：
既に一定の開催実績もあるようだが、今回の提案では会場のスケールアップも視野に入れているように見受けられた。そうした大規模会場にチャレンジするという理解でよいか。また、報償費としてゲストスピーカーへの謝礼が計上されているが、これはイベント内で講演やディスカッションを行う構想があるのか。

団体：
お見込みのとおりである。
ディスカッションに関して、昨年は仙台市環境局を招いて「しくじり会議」という企画を実施し非常に好評であった。

参加者からは行政に親近感が湧いたという声があった。今後もゲストスピーカーを呼び、こうした企画を取り入れたいと思っている。

大井委員：
若者が主体的に参加できる仕組みを意識しているようだが、その点はいかがか。

団体：
昨年からは企業スポンサー集めを若者に任せるなど、主体的な関わりを重視する運営に移行している。

眞野委員：
在庫としての服はどこかに保管しているのか。

団体：
私（団体代表者）自身がかつて店舗を運営していた際に使用していた富沢の倉庫に保管している。

眞野委員：
活動に参加している学生たちについて、彼らはこの活動を通じてどのような感想や達成感を得ているのか、具体的なエピソードがあれば聞きたい。

団体：
活動のコンセプトも学生たちと共に考えたものであり、非常に納得感を持って取り組んでいる。また、活動開始時には「この活動を通じて何を得たいか」という問いを必ず投げかけており、たとえばマーケティングや渉外など、自分の興味に応じた体験ができるように配慮している。

眞野委員：
活動は以前から存じ上げていたが、今日の話でより深く理解できた。私のこどもたち世代もファッションが好きで、流行のサイクルが非常に早いことに不安を感じていた。このような活動を通じて、若者たちが自らの生活を主体的にデザインしていくという意識が育まれていくことを期待している。

事業 12
事業名： «自由提案型» インクルーシブ防災プロジェクト
団体名： NPO 法人 UBUNTU

柴田委員長：
事業として何を行うのか、もう少し具体的に教えてほしい。

団体：
普段自分たちが関わっている障害児や医療的ケアが必要なこどもたちの家族を対象に、そこからつながりを広げ、そのこどもが通う学校の関係者なども巻き込みたい。将来的には、重症心身障害のこどもたちが地域の中で安心して暮らせる環境をつくるのが目標である。まずは第一歩として、地域の当事者家族とその近隣住民を巻き込んでいく。

柴田委員長：
今年度は当事者の家族やその近隣の方々と連携するところから始めるということで間違いないか。

団体：
私たちの理想では、地域の方々を巻き込み、行政の方々にも参加いただきたいと考えている。行政の方も関わっていただければ何か気づきがあるはずで、その気づきを共有していければと思っている。私たち自身も学びながら進めていく。

太田委員：
事業内容を整理すると、①個別避難計画作成のワークショップ、②福祉施設等の BCP（事業継続計画）シミュレーションができるワークショップや研修、③障害児と家族を対象にした防災キャンプ、④インクルーシブ防災の勉強会や講演会、⑤災害時の繋がりを強化するためのサロン、以上 5 種類の事業がある。各事業はそれぞれ 1 回ずつ実施する想定か。

団体：
その通りである。回数は増やしていきたいが、まだ経験不足の部分のほか、予算や人員の制約もあり、同時に他の事業も行っているため、回数を増やすことは容易ではないと考えている。

大井委員：
この分野において、何が一番の課題ととらえているか。

団体：
各々の防災活動が連携しておらず、バラバラな対策になっていることだと考えている。

大井委員：
地域の状況によって災害特性や優先すべき対策も異なるため、段階的に実現に近づけていくことが重要だと考える。

齊藤委員：
私も NPO を経営しており気持ちはよく分かるが、「必要性は感じているものの、実際には取り組みが進んでいない」という現状はよくある。インクルーシブ防災に関して、その原因は何だと考えるか。

団体：
誰であっても初めてのことに取り組む際は勇気がいるし、他力本願になっているからだと考える。誰かが旗振り役となって推進していかないと前に進みにくい部分があるため、モデル的にこの事業を進めていくことは非常に意義があると思う。

齊藤委員：
貴団体の発言にもあったとおりノウハウがないと取り組みが難しいこともあると思うが、相談できる相手はいるか。

団体：
東北大学の先生といった知見者とのつながりもあり、インクルーシブ防災に関心を寄せている専門家の方々は多くいると認識している。今後はそういった知見を取り入れてワークショップ等を進めていければと考えている。

眞野委員：
インクルーシブ防災の重要性については共感する。私も BCP 作成のワークショップを行ったが、考えれば考えるほど複雑で難しいと感じた。また、実際に避難所運営委員として関わった際は、発達障害のこどもが避難して一晩過ごすことに多くの課題を感じた経験もある。
多くの課題がある中で優先順位を付けて取り組むことが重要だが、今のところの優先順位はどうか。

団体：
医療的ケア児や重症心身障害のこどもたちの避難支援が最優先である。例えば、普段バギーを使っているこどもの介助方法を行政や関係者が理解し、適切に支援できる体制づくりが不可欠だ。

眞野委員：
合わせて、自分たちが住む地域で支援体制を構築することが重要だと思うが、すでに何らかの取り組みはしているのか。

団体：
地域に出ていき、医療的ケアが必要なこどもたちが生活していることを伝える活動を続けている。

眞野委員：
そうであれば、民生委員、町内会長、防災担当者など地域のキーマンに相談し、繋がりを作っていくことが重要である。困っていることを打ち明けることで支援の輪が広がるはずだ。

事業 13
事業名： «自由提案型» 持てる！使える！きみだけの災強バッグ ～教材化プロジェクト～
団体名： 災強のすけっと

柴田委員長：
予算について、水の費用が 1 万 8000 円ということだが、これは購入するということか。

団体：
ペットボトルを各自持参して水道水を用いれば費用を抑えることができる。水の費用はあくまで購入した際の見積もりとなっている。

柴田委員長：
ワークショップの団体協力費、交通費はどのような考えで積算しているのか。

団体：
団体協力費は 1 団体につき 5000 円で積算している。
交通費について、所属メンバーの多くは仙台市を中心に活動しているが、一部は東北地方以外の地域にも在住している。我々は学生であり、経済的にも厳しい状況にあるため、交通費がアルバイト収入の 2 ヶ月分に相当するような場合もある。これはプロジェクトの継続性に影響するため、交通費の支援も重要であると考えている。

柴田委員長：
最後にもう一点、人件費についてだが、これは誰の人件費か。

団体：
我々の人件費である。

大井委員：
予算に関連し、今回の事業で使用するルールセットや印刷物等も予算に含まれているのか。

団体：
お見込みのとおりである。
実証ワークショップは 3 回実施予定であり、そのうち 1 回目については既に協力団体に印刷をお願いしている。2 回目、3 回目のワークショップ分と、1 セットパッケージ化する分の印刷費が含まれている。今後、事業を広げていく際には、別のところで資金を調達し、まとめて印刷することでコスト削減を図りたいと考えている。

眞野委員：
ワークショップの所要時間について伺いたい。1 回あたりどの程度を想定しているか。

団体：
1 回あたり約 1 時間を想定している。こどもたちへの説明も含めた時間であり、過去に実施した際もこの程度で

収まっている。

眞野委員：
現在、手順書の作成段階とのことだが、これまでワークショップに参加したこどもたちの声は反映されているのか。

団体：
令和７年 ３ 月に実施したワークショップのアンケート結果を反映させる形で手順書を作成している。こどもの声を取り入れ、繰り返しの実施を通じて改善し、将来的には販売も視野に入れている。

眞野委員：
最終的にパッケージ化されたワークショップを実施するのは、どのような方を想定しているか。

団体：
基本的には誰でも実施できるようにと考えている。例えば、小学校や町内会などでの活用を想定している。

齊藤委員：
ファシリテーターが必要なワークショップ形式で行う理由は何か。

団体：
個人ワークではなく集団での活動に意義があると考えている。令和７年 ３ 月にワークショップを実施した際も、グループ内でこどもたちが刺激し合いながら学ぶ様子が見られたため、ワークショップ形式が必要であると判断している。こどもたちは統率が取りにくい場合も多いため、進行役の存在は不可欠である。

齊藤委員：
ワークショップの経費についてだが、６時間分というのは３回分の合計か。

団体：
お見込みのとおりである。実証ワークショップは、１日の中で３回実施する形式で、各回１時間程度を予定している。よって、６時間は３日分の合計になる。

齊藤委員：
ということは、団体協力費として計上されている費用が１回あたり 5,000 円だと少ないのではないか。

団体：
その点は検討が不十分であった。なお、今回の対象者は、専門家ではなく地域の町内会や防災団体など、地元の方々を想定している。

太田委員：
私のイメージでは防災に関わる団体には高齢者が多く、そういった方々がこども向けに実施する場面も多くあると認識している。高齢者とこどもが一緒に行うことにも意味があると考える。

また、手順書が若者向けに偏る可能性もあるため、高齢者でも理解できるよう検証していただきたい。将来的には、障害者や高齢者の一人暮らしなども今後の参加想定に含めていただきたい。

団体：
高齢者については正直なところ想定していなかったが、ご指摘を受けて考慮する必要があると感じた。

太田委員：
障害のある方や高齢者は一人で避難するのが困難である場合がある。そこでグループワークを通じて、周囲の人々がそれぞれの状況を把握し合うことも重要な目的であると考えている。

柴田委員長：
ファシリテーションに関してだが、例えば中学生が年下のこどもたちに教えるなど、年齢の近いファシリテーターによる活動も有効だと感じた。各区の中央市民センターがジュニアリーダーという、こどもが年下をお世話する仕組みがあり、機会があれば連携してみてほしい。

3　協議（非公開）
4　閉会

〈議事録署名人〉

［委員長］ 柴田由紀

［署名人］ 大井 菜摘